

文化財保護課

内堀遺跡群

—仮称大室公園整備事業に伴う

埋蔵文化財確認調査報告書—

1988

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

内堀遺跡群

1988

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は群馬県のほぼ中央にあります。水と緑と詩の町と言われているように、利根川を筆頭に多くの川が満々と水をたたえて流れしており、また赤城山を背景にして木々の緑が美しい四季折々の変化に富む風光名麗な都市です。

内堀遺跡周辺は本市の最東部（旧城南地区）の赤城山南麓地帯に位置し、赤城山や谷川連峰が眺望できる起伏に富んだ複雑な地形が展開するすぐれた自然景観を形成しています。こうした自然環境の中には、太古から人々の生活が開始され、これを示す遺跡も多く、特に国指定史跡前二子・中二子・後二子古墳が並列するあたりは、東国の名族上毛野氏の本貫の地とされるなど、豊かな史的景観を形成しています。

本市はこの恵まれた環境を生かして、およそ37ヘクタールの総合公園としての（仮称）大室公園」の建設を計画しました。

本確認調査はこの公園建設設計画に先立ち、当地の埋蔵文化財の分布状況を調査したものであり、公園の設計や今後の発掘調査に方向性を与えることが目的です。

調査の結果、住居跡や古墳など多くの遺構が確認されました。また、それらの遺構を中心に広くほぼ全域にわたり土器片や埴輪片など様々な遺物も多数出土しております。

ここで得られた多くの資料が公園建設の中に十分生かされるとともに、広く考古学研究の参考になれば幸いです。

最後になりましたが、調査を行った担当者や作業員の方々、また終始御援助いただきました関係機関の皆様方に対しまして深く感謝申し上げます。

昭和63年3月3日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口和雄

例　　言

1. 本書は大室公園整備事業に伴う内堀遺跡群（略称62-E-11）の確認調査報告書である。
2. 内堀遺跡群は、前橋市西大室町字内堀他4字に所在する。
3. 調査面積は200,000m²である。（総面積369,000m²のうち国指定史跡、沼、山林等を除いた面積。）
4. 本確認調査は前橋市の依頼で前橋市埋蔵文化財発掘調査団が市費により行ったものである。
5. 本確認調査（整理作業を含む）は昭和62年6月29日から昭和63年2月29日まで実施した。
6. 本報告書中の土色は「新版標準土色帖」（小山、竹原、1970）に基づいている。
7. 調査組織は次のとおりである。

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 関口和雄、事務局長 福田紀雄、事務局次長 浜田博一、発掘調査係員（担当）園部守央、桑原 昭

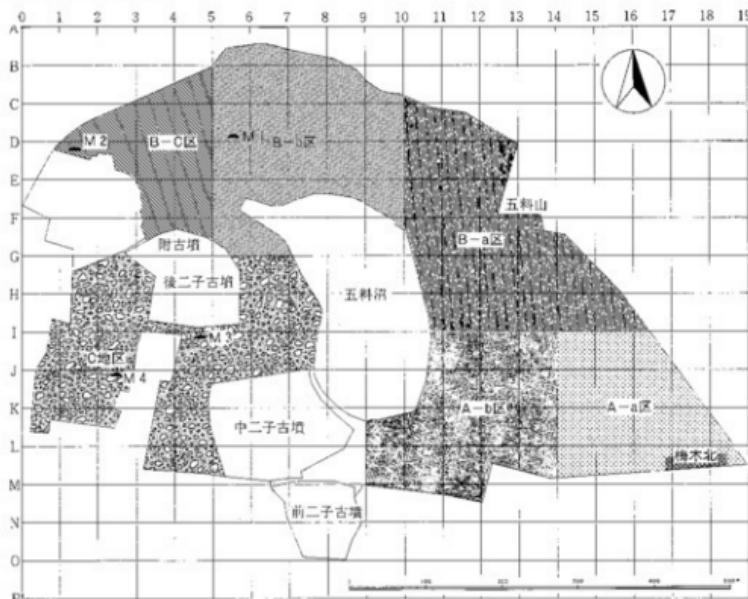
8. 本遺跡群の資料は前橋市教育委員会の管理下に保管されている。
9. 確認調査作業員（順不同） 稲葉義則、糸井朱美、佐藤佳子、橋本登代美、内藤典子、高橋ふみ枝、木村源次郎、木村かく乃、木村はる子、高橋恒夫、関口憲峰、神野 信、内藤たか、大木茂美、岡安善次郎、近藤盛次、近藤条司、横山藤吉、諸田樓子、諸田恒次郎、内藤よし、設楽行子、木村玉代、鹿沼豊子、中東 明、野口喜三郎、小林梅子、浜岡シズエ、高橋きしの、神沢芳子、久保もり子、千吉良美代子、小保方豊五郎
10. 本書で言う「住居跡」とは「住居跡と推定されるもの」を、「住居跡？」は「住居跡の疑いのあるもの」をそれぞれ意味する。
11. 本書住居跡の時代判定は、下記のような覆土の観察及び形状規模により行った。

覆 土 土 色	含 有 物（鉄石等）	およそ時代判定
暗 黄 褐 色 10YR 4/6, 5/6等	浅間系鉄石若干含む。	縄文時代
黑 色 10YR 4/6, 5/6等	白っぽい鉄石を多量に含む（しもぶり状）。場合によつては焼土、炭化物が散る。	弥生時代後期～古墳時代前期（石田川）
黑 褐 色 10YR 4/6, 5/6, 6/6等	同 上	古墳時代中・後期
暗 褐 色 10 YR 4/6, 5/6等	白っぽい鉄石を多量に含む（しもぶり状）。	弥生時代前・中期または古墳時代後期以降

12. 調査を進めるにあたり、終始次の諸氏、諸機関から御指導、御助言、御協力をいただいた。心より感謝申しあげる次第である。
群馬県埋蔵文化財センター所長 井上唯雄、西大室町自治会長 岡田正治、前橋市荒砥農業協同組合、前橋市立大室小学校
13. 本書の原稿執筆・編集は園部守央・桑原 昭が行った。

凡 例

1. 本遺跡群報告書作成にあたり、本遺跡群内を便宜的に大きくA・B・Cの3地区に分けた。そして、さらにA地区をa区・b区に分け、B地区をa区・b区・c区に分けたが、図示する下記の通りである。



2. 各遺構の縮尺は、遺跡全体図(付図1)が $\frac{1}{1000}$ 、遺構分布図(付図2)・遺物分布図(付図3)・遺物詳細分布図(付図4)が $\frac{1}{2500}$ 、梅木遺跡北の平面が $\frac{1}{200}$ 、地断図が $\frac{1}{40}$ となっている。
3. 各遺物の実測図は $\frac{1}{4}$ を基本としている。都合上ほかの縮尺を用いている遺物もあるが、その場合は図面に示した。実測図の見方は下記の通りである。



4. 水系のレベルは各遺構ごとに統一した。

5. 各遺構の略称は次の通りである。

H = 土師器を伴う住居跡 W = 溝 M = 古墳

目 次

序	I
例 言	II
凡 例	III
目 次	IV
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 確認調査の経過	3
IV 土 層 と 地 形	4
V 各地区の概観	13
1. A地区	13
(1) 梅木遺跡北	13
(2) a区	17
(3) b区	18
2. B地区	18
(1) a区	18
(2) b区 M1	21
(3) c区 M2	24
3. C地区	24
(1) M3	24
(2) M4	24
遺物観察表	25
地区別遺物統計表	33
地区別住居跡統計表	33
VI ま と め	34
図版 1	写真23 確認調査前（北西から）	
	写真24 作業風景（東から）	
図版 2	写真25 梅木遺跡北遺構確認状況（西から）	
	写真26 古墳（M1）確認状況（西から）	
図版 3	写真27 古墳（M2）確認状況（東から）	
	写真28 古墳（M3）確認状況（南西から）	
図版 4	写真29 古墳（M4）確認状況（東から）	
	写真30 トレンチ掘削状況（北西から）	
付図 1	遺跡全体図	
付図 2	遺構分布図	
付図 3	遺物分布図	
付図 4	遺物詳細分布図〈表面調査の結果〉	

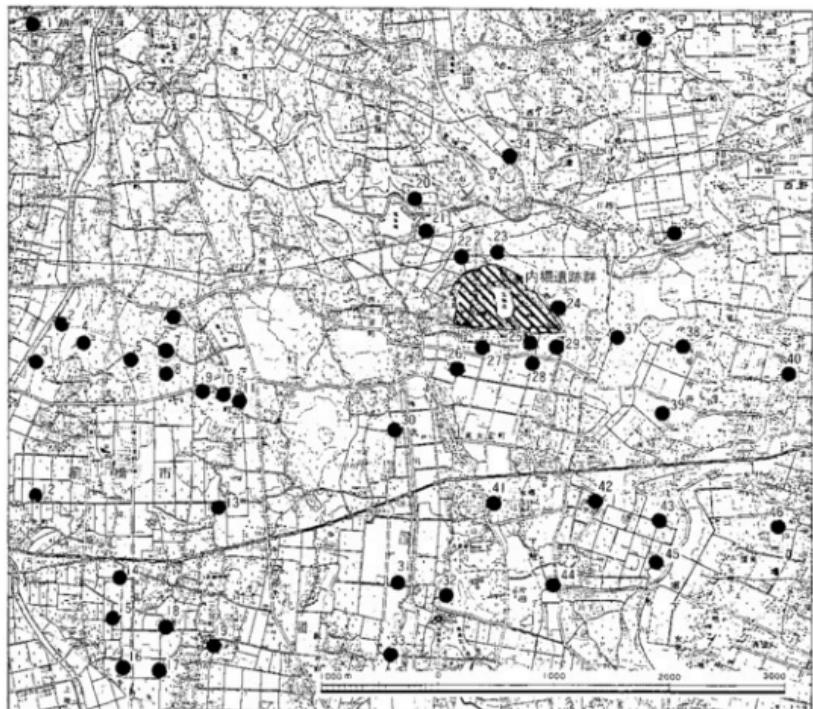
I 調査に至る経緯

- 昭和42年度 前橋市総合整備計画（1968～1977）策定。この中に大室地区の整備に関する記述がある。
- 昭和46年11月22日 「わぬき会」=（市議会OB会）世話人代表 小林二郎より「城南史跡公園設置方について」の陳情書が前橋市教育委員会教育長 伊藤順あてに提出される。
- 昭和51年度 前二子古墳の国指定区域内を買上げ。
- 昭和52年度 後二子古墳・附小古墳の国指定区域内を買上げ。
- 前橋市新総合計画「すばらしい前橋」（1978～1987）策定。この中に城南地区の東大室町・西大室町地内に、国指定史跡占墳群（前二子・中二子・後二子古墳）の保存と環境整備や郷土資料館等の設置を含む総合公園の建設が盛り込まれた。
- 昭和53年度 中二子古墳の国指定区域内を一部を除き買上げ（西大室町内堀2627-1及び西大室町内堀2629は買上げ不能）。
- 昭和59年12月12日 西大室町内堀2629番地と2627-4番地を前橋市土地開発公社が買収（市費）。
- 昭和60年度 西大室町内堀2629番地を公園緑地課が買い戻す（補助金）。
- 昭和61年度 前橋市新長期計画「ダイナミック前橋」（1988～1997）策定。
- この中に、大室公園整備事業（三二子古墳整備含む）が盛り込まれる。
- 昭和61年10月25日 「大室公園整備計画にかかる打合わせ」が社会教育課と公園緑地課との間で持たれる。
- 昭和62年1月27日 「大室公園土地管理委託に関する打合わせ」が荒砥農協・営農集団・前橋市 土地開発公社・公園緑地課・文化財保護係との間で持たれる。
- 昭和62年3月1日 詳細分布調査実施。
- 昭和62年4月30日 詳細分布図作成。
- 昭和62年5月11日 前橋市長 藤井精一より教育長岡本信正あてに確認調査依頼、提出される。



写真1 仮称大室公園予定地全景

II 遺跡の位置と環境



1. 天神乳呂遺跡
2. 荒砥諏訪西遺跡
3. 荒砥宮田遺跡
4. 荒砥諏訪遺跡
5. 柳久保遺跡群
6. 常子小学校々庭遺跡
7. 大久保遺跡
8. 須無遺跡
9. 荒砥下押切遺跡
10. 荒砥中屋敷遺跡
11. 荒砥保育所遺跡
12. 荒砥北三木堂遺跡
13. 荒砥上之坊遺跡
14. 荒砥後櫻遺跡
15. 宮川遺跡
16. 宮原遺跡
17. 烏原遺跡
18. 荒砥天之宮遺跡
19. 青柳遺跡
20. 七ヶ石遺跡
21. 北山遺跡
22. 上縄引遺跡
23. 下縄引遺跡
24. 久保皆戸遺跡
25. 梅の木遺跡
26. 大室小学校々庭遺跡
27. 荒砥上原遺跡
28. 荒砥五反田遺跡
29. 荒砥上川久保遺跡
30. 荒砥茅原遺跡
31. 二本松遺跡
32. 伏知遺跡
33. 二之郷遺跡
34. 西原遺跡
35. 洪沢遺跡
36. 稲荷山遺跡
37. 多田山遺跡
38. 多田山東遺跡
39. 桐田遺跡
40. 御伊勢坂遺跡
41. 石山遺跡
42. 向井遺跡
43. 今井南原遺跡
44. 中畠遺跡
45. 川上遺跡
46. 市場寺南遺跡

図1 内堀遺跡群と周辺の遺跡

内堀遺跡群は前橋市の最東部、赤堀町と粕川村に接した赤城南麓地帯にある。このあたりはいわゆる赤城火山斜面と呼ばれる部分に属し、縄文時代以前から人類が生活していた痕跡がみられる。たとえば旧石器時代の石器が出土した柳久保遺跡群（本市が59年度より調査）や溝溝墓や古墳が多数検出された上縄引遺跡（55年度調査）、また三二子古墳と何らかの関係のあると思われる豪族の館跡と推定される遺構が検出された梅木遺跡（60年度調査）など周辺には貴重な遺跡が多い。さらに、国指定史跡の三二子古墳をはじめとして一帯は古墳の密集地である。

III 確認調査の経過

1. 調査の方法

今回の確認調査の目的は大室公園予定地(369,000m²)内の埋蔵文化財の遺構と遺物の分布状況や、時代や種類を明らかにすることなので五料沼や三二子古墳等の除外地以外の200,000m²全てを調査対象とし、調査方法は筋掘り(トレンチ)を基本とし、与えられた工期は4ヵ月間であった。

調査をするにあたり全区域共通したグリッドを用いた。グリッドは50×50mを基本とし南北をx軸、東西をy軸とした。各グリッドは北西隅を基点とし、x=アルファベット、y=算用数字であらわした。

調査は幅1.3mの筋掘り(トレンチ)を入れ、遺構確認を行った。東西方向に走るトレンチは10m間隔で南北に走るトレンチは、4ラインと12ラインの2本設定した。また、特に重要なと思われる梅木遺跡(昭和60・61年調査)の北側は全面表土を剥ぎ、古墳(M1・M3・M4)付近はそれそれ拡幅したりトレンチを増やしたりした。遺構確認は標準土層第5・6・7層で行った。遺構確認調査後、遺構配置図を $\frac{1}{200}$ の縮尺で実測作成し、特に梅木遺跡の北側については縮尺 $\frac{1}{20}$ で平面図、地層断面図を作成した。地層断面図は、東西方向ではE・Kトレンチ北壁、南北方向では4・12トレンチ西壁全て縮尺 $\frac{1}{20}$ で作成し、古代の地形を観察した。遺物は、グリッド単位で一括取り上げを行った。写真による記録も綿密に行った。測量基準点の水準は、「仮称城南公園現況図」BM9(128.50m)より移動。国家座標A-0杭はx=+43350、Y=-57250で、南北方向のx軸は真北を向いている。

2. 調査の経過

作業名 月日	重機掘削	床面精査 sondage	遺構確認	地層断面図(縮尺1/20) 遺構平面図(縮尺1/20)	写真撮影	遺構平面図 (縮尺1/200)
7 10 20	■	■	■	■ ■	— —	
8 10 20	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ — —	
9 10 20				■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■
10 10 20				■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■

図2 確認調査の経過

IV 土層と地形



写真2 4トレンチ地断 (南東から)



写真3 Eトレンチ地断 (南から)



写真4 Kトレンチ地断 (南から)



写真5 12トレンチ地断 (東から)

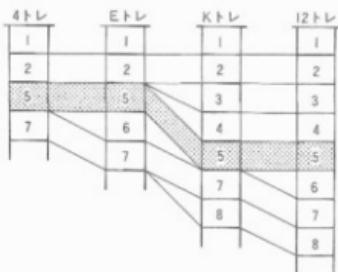


図3 標準土層対照図

1. 耕作上層
2. 不透水層
3. 褐色・暗褐色系土層。粘性あり。小礫含む。
4. 褐色・黒褐色系土層。粘性あり。軽石含む。
5. 暗褐色・黒褐色系土層。B軽石・Bアッシュ層。(1108年〈天仁元年〉の浅間山噴火による火山灰)。
6. 黒褐色・黒色系土層。粘質土層(のろ土含)。
7. 黄褐色・褐色系土層。ローム層。
8. 暗褐色・暗灰黄色系土層。粗砂層。

大室公園予定地は369,000m²であり、そのうち調査対象面積は200,000m²と広範囲にわたっている。したがって、各調査地点で大きな土層変化が予想される為、E・K・4・12の各トレンチ毎に標準土層を設定し（挿図4・5・6・7）、後に遺跡全体の土層を照合することにした。（挿図3）

E・K・4・12の各トレンチの地層断面を全てにわたり観察をして地層を分けた所、土層は合計70層を数えた。それらを大別すると上記のように8層にまとめられる。上記地層番号は挿図3・4・5・6・7に共通である。挿図4・5・6・7の土層変化では、特に第5層に注目すると平安時代の地形が観察される。

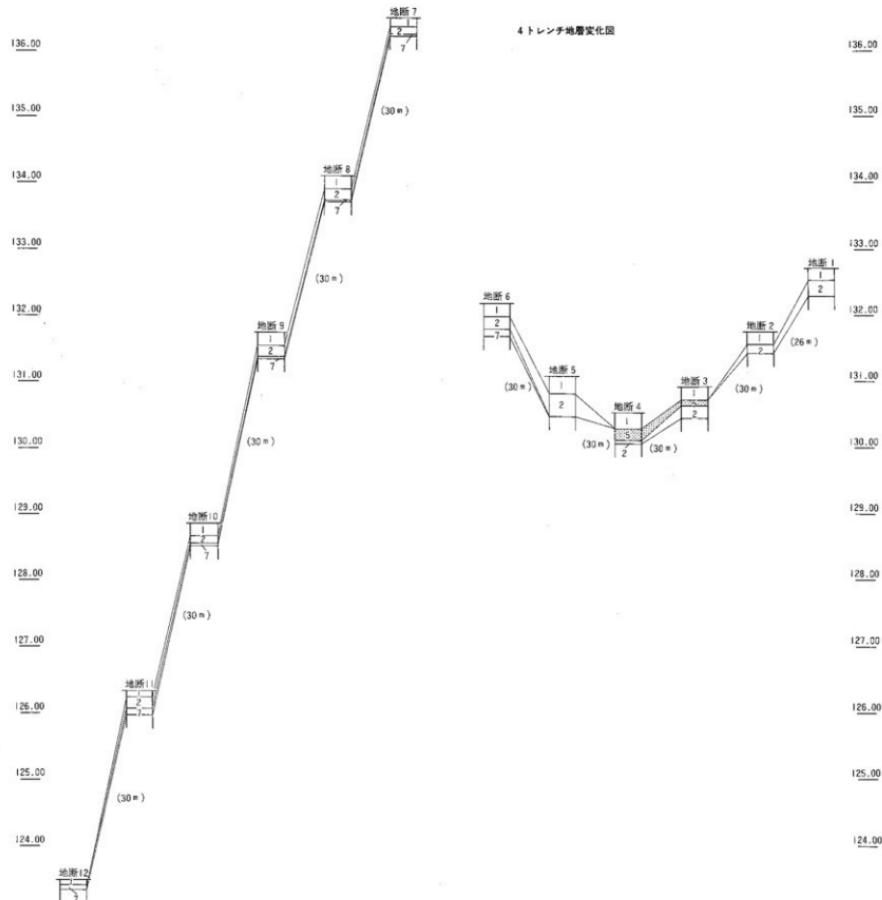


図4 地形と土層対照図(1)

139.00

139.00

138.00

138.00

137.00

137.00

136.00

136.00

135.00

135.00

134.00

134.00

133.00

133.00

132.00

132.00

131.00

131.00

130.00

130.00

129.00

129.00

128.00

128.00

127.00

127.00

E トレンチ地層変化図

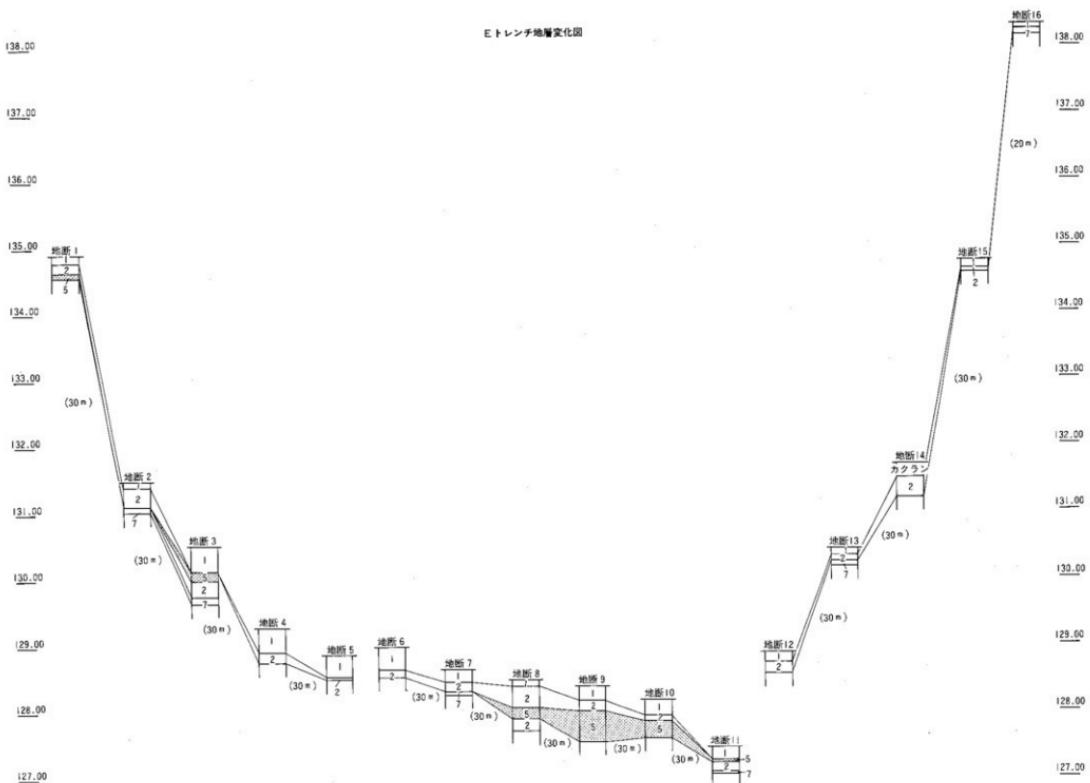


図5 地形と土層対照図(II)

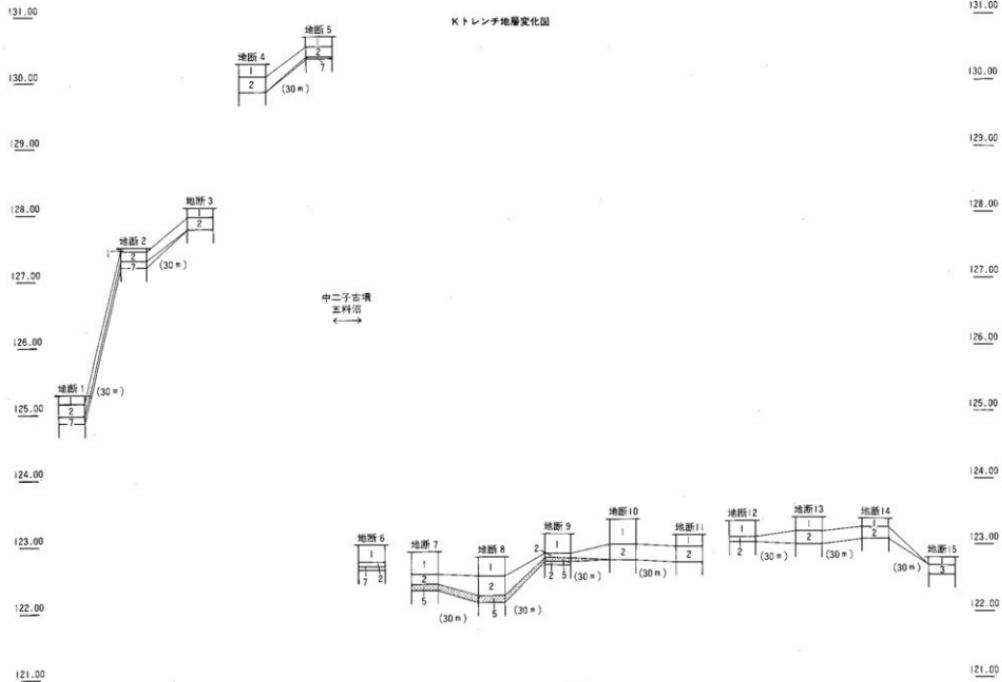


図6 地形と土層対照図(III)

図12 トレンチ地層変化図

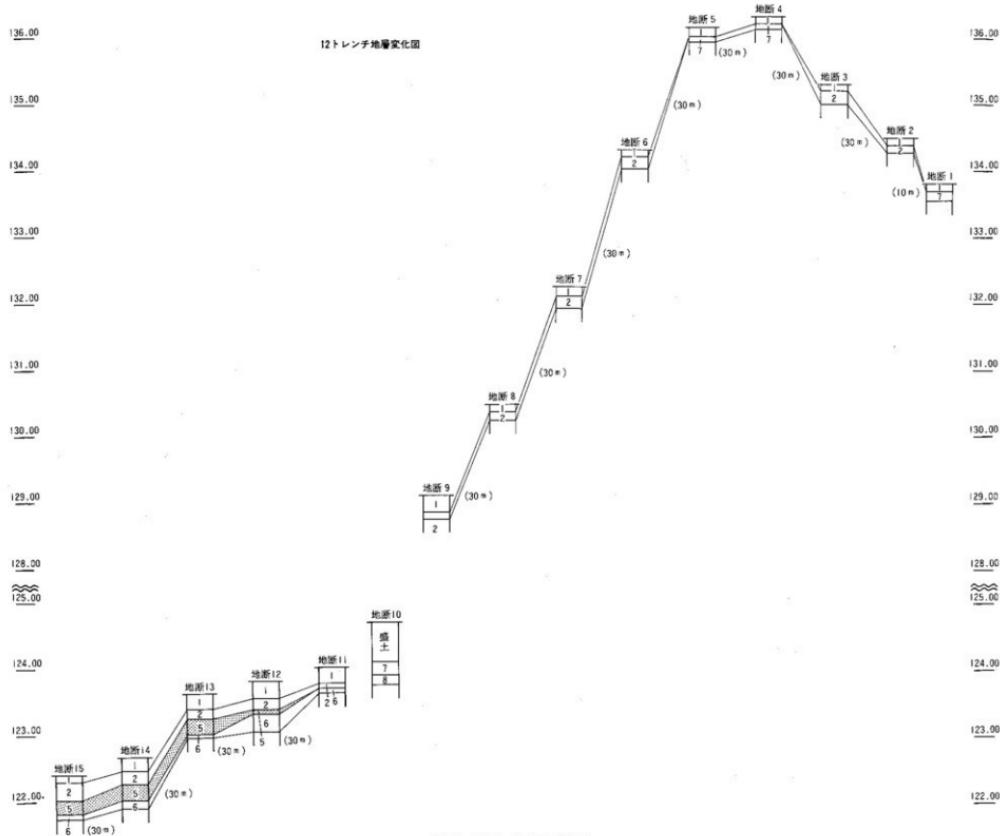


図7 地形と土層対照図(IV)

V 各地区の概観

1. A 地区



写真6 A地区遺構確認状態(東から)

本遺跡の南東で、9ラインから東、Iラインから南の一帯をA地区とした。本書ではA地区を、さらに3区域に分けた。昭和60・61年に発掘調査した梅木遺跡の北部地区を梅木遺跡北とし、14ラインから東の地区をa区とした。また、14ラインから西の地区はb区とした。Iライン付近と14ライン付近は共に、現況では、農業用水路が流れている。またa区の東部は、桂川の泡瀬原となっており、水田として活用されていた。A地区内のその他の部分は、桑園・麦畑等の畠地が主で、荒蕪地、民家跡地もあった。遺構は、住居跡が26軒、住居跡?が18軒確認され、合計では44軒となった。また梅木遺跡北からは、住居跡のほかに前回調査(昭和60・61年)で検出された柵列の続きと推定される柱穴も10数個確認された。遺物では、合計2,409点が検出され、3~5片接合以上及びほぼ完形の遺物は11個体出土した。

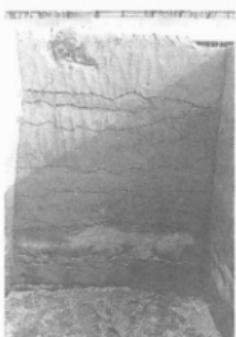


写真7 梅木遺跡北深堀(北から)



写真8 梅木遺跡北(西から)

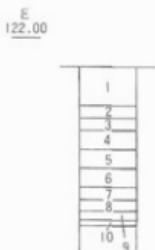


図8 梅木遺跡北標準土層図

(1) 梅木遺跡北

1. 褐色土層 (10YR 5/6) 砂質土 (細砂)。粘性なし。しまり強い。
2. 褐色土層 (10YP 5/6) ハードローム。粘性あり。
3. 褐灰色土層 (10YR 5/6) 砂質土 (細砂)。粘性なし。しまりあり。
4. 黄褐色土層 (10YR 5/6) ハードローム。粘性あり。
5. 灰黄褐色土層 (10YR 5/6) 細砂 (シルト、砂混在)。粘性なし。しまり強い。
6. にぶい黄褐色土層 (10YR 5/6) シルト (粘土に非常に近い)。粘性非常に強い。
7. 褐灰色土層 (10YR 5/6) 粗砂。粘性なし。
8. 灰黄褐色土層 (10YR 5/6) 細砂。粘性なし。
9. 灰黄褐色土層 (10YR 5/6) シルト。粘性強く、しまりややあり。
10. 黄褐色土層 (10YR 5/6) 粗砂と鉄分混在。粘性なし。しまり強い。

本遺跡は、A-a区の南東隅に位置し、梅木遺跡（昭和60年度調査）の北側にある。
遺構の分布 確認された遺構は、柵列の柱穴と推定されるもの19個、住居跡5軒、住居跡？1軒、溝1条等である。昭和60年度調査で検出された環濠の続きは確認できなかった。

柵列は、昭和60年度調査で検出されたものの西側部分の北へ伸びる地点で17個、東側部分で2個確認された。西側部分の北へ伸びる地点で確認された柵列をみると、部分的に2個或は3個がほぼ東西方向に並列しているので、居館跡（？）の入口施設とも考えられるかも知れない。

L-17グリッド内の重複している住居跡2軒については、幅1mのトレンチ発掘調査を行った。しかし、H-1・H-2共に、正確な壁は検出されず、住居跡の範囲や、重複関係は推定するにとどまった。出土した土器により、H-1・H-2共に、紀元後5世紀頃に使用されていたと推定できた。住居跡5軒のうち他の3軒については、2軒が弥生前・中期及び古墳後期以降と推定され、1軒は古墳中・後期頃と推定された。また、住居跡？の1軒は古墳中・後期頃と推定された。

溝については、昭和60年度調査で検出された4号溝の続きを推定される。
遺物の分布 取り上げられた遺物は、計389点で、ほかに、ほぼ完形に近い土器が7個体出土している。検出した遺物総数の中では、やはり、土師器片が最も多く365点。以下、埴輪の破片が15点。



写真9 H-1・2床面
(東から)



写真10 H-1・2掘り方
(東から)

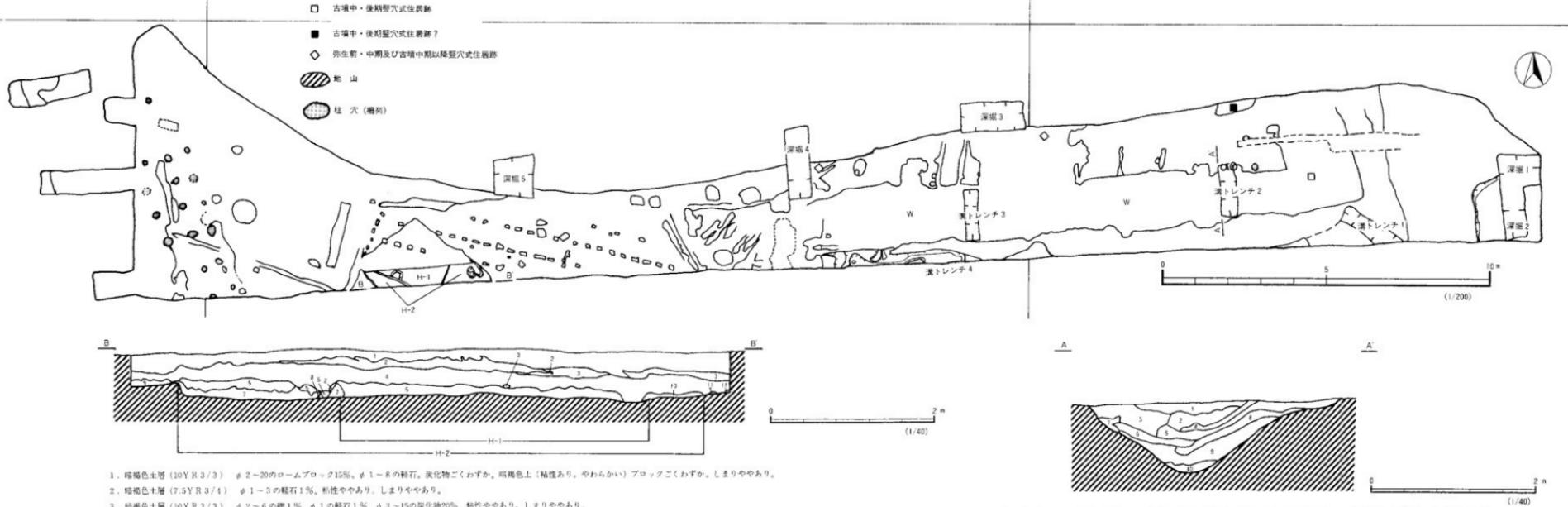
陶器類6点。石器、縄文土器、須恵器の破片が各1点ずつ、そして、残存率約5%の紡錘車も1点検出された。H-1からは、和泉期の塊が3個体、ほかに、壺が1個体出土している。全て残存状態が良く完形だった。H-2からは、和泉期の完形の塊と壺が出土。H-1・2共に紀元5世紀頃と推定。



写真11 H-1土器出土状況（北から）



写真12 H-2上器出土状況（東から）



1. 暗褐色土層 (10YR 3/3) φ 2~20のロームブロック15%、φ 1~8の軽石。炭化物ごくわずか。暗褐色土 (粘性あり。やわらかい) ブロックごくわずか。しまりややあり。
2. 暗褐色土層 (7.5YR 3/4) φ 2~6の軽石1%。粘性ややあり。しまりややあり。
3. 助禹色土層 (10YR 3/3) φ 2~6の礫1%、φ 1の軽石1%。φ 3~15の炭化物20%。粘性ややあり。しまりややあり。
4. オリーブ褐色土層 (2.5Y 3/3) φ 2~10の軽石1%、φ 3~7の礫1%。φ 20~50の砂数個。粘性ややあり。しまりややあり。
5. 黒褐色土層 (2.5Y 3/2) φ 1~5の軽石3%。粘性ややあり。しまりややあり。
6. 黑褐色土層 (10YR 3/2) φ 1の軽石1%、φ 3~5のロームブロック15%。粘性ややあり (5よりあり)。しまりあり。
7. オリーブ褐色土層 (2.5Y 4/4) 砂まじローム。粘性あり。しまりややあり。部分的にかたいところあり。
8. オリーブ褐色土層 (2.5Y 4/4) 7とはほぼ同様であるが砂が多い。粘性ややあり。しまりあり。
9. 黄褐色土層 (2.5Y 5/3) ローム層であるが砂質 (細砂) がたいへん多い。粘性ややあり。しまりややあり。
10. 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y 3/3) 粘性ややあり。しまりあり。
11. 黄褐色土層 (2.5Y 5/4) 砂質ローム。粘性あり。しまりややあり。

図9 梶木遺跡北平面図・地層断面図

1. 黒褐色土層 (2.5Y 3/2) 細砂。ローム粒20~25%。粗砂15~20%。φ 10~20の礫2%。スコリア1%。粘性あり。しまりややあり。
2. オリーブ褐色土層 (2.5Y 4/4) 細砂。ローム粒25~30%。粗砂20%。φ 10~20の礫2%。粘性なし。しまりややあり。
3. 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y 3/3) 細砂。ローム粒20~25%。粗砂15%。スコリア1%。粘性なし。しまりややあり。
4. オリーブ褐色土層 (2.5Y 4/4) 細砂。ローム粒20~25%。粗砂20~25%。粘性なし。しまりややあり。
5. オリーブ褐色土層 (2.5Y 4/3) 細砂。ローム粒30~40%。φ 10~20の礫2%。粘性ややあり。しまりややあり。
6. 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y 3/3) 細砂。ローム粒15~20%。φ 10~20の礫2%。粘性なし。しまりややあり。
7. 黄褐色土層 (2.5Y 5/6) 粗砂層。粘性なし。
8. オリーブ褐色土層 (2.5Y 4/6) シルト。ローム粒40%。小礫1%。粘性なし。しまりややあり。
9. 明灰黄色土層 (2.5Y 4/2) 細砂。ローム粒30~40%。粗砂30~40%。φ 10~20の礫2%。粘性なし。しまりあり。
10. にほい黄色土層 (2.5Y 6/4) 粗砂層。しまり。粘性なし。



図10 梅木跡北出土遺物

(2) A-a区 (梅木跡北は除く)

遺構の分布 住居跡は南半分の梅木跡に近い方に多く11軒、また住居跡？は10軒確認された。古墳時代中期以降と推定されるものが多い。北部分のJ-15グリッドのJ3、J4トレンチで溝の様な疊集中部分が検出された。それにより水

写真13 梅木跡北出土遺物(3/4~5/6)の流れとも推測できるので住居跡の流失も考えられる。梅木跡の館跡と関係のある遺構の存在が予想されたが確認されなかった。

遺物の分布 調査部分は全域にわたり土器片等の遺物が出土。土師器が圧倒的に多く破片1,013点が出土。次いで縄文土器の破片215点、以下須恵器、陶器類、埴輪の各破片と石器が出土。縄文は

Kライン以北に比較的多い。東部の低い部分は桂川の氾濫原と考え調査せず。

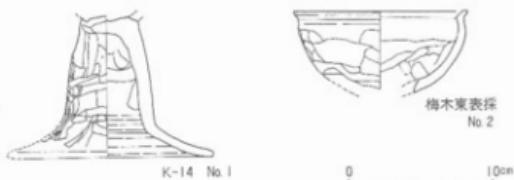


図11 A-a区出土遺物

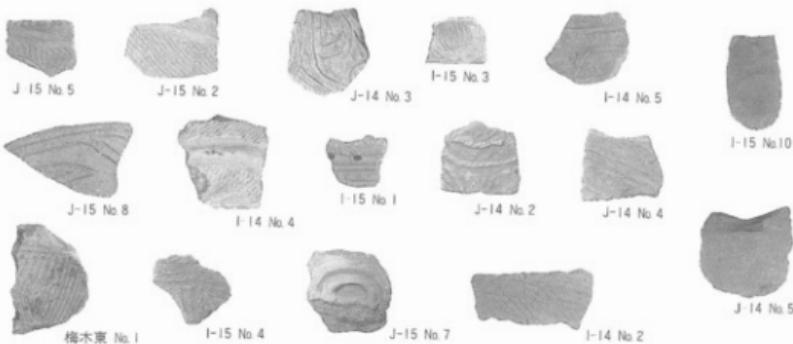


写真14 A—a区出土遺物（ノ₁～ノ₁₀）

(3) A—b区

遺構の分布 東半分の、水田からa区との境あたりまでの谷地部分には住居跡はほとんど確認されず、弥生前期～中期と推定される住居跡が1軒だけ確認された。地表下40cm前後の位置に浅間のB軽石及びBアッシュを確認したが水田跡の確認には至らなかった。西半分は住宅による擾乱部分以外の所に住居跡9軒、住居跡？7軒が確認された。

遺物の分布 土師器片640点を筆頭に陶器類、埴輪、須恵器、繩文土器の各破片と石器がそれぞれ数点から10数点出土した。(いずれも完形に近いものはなかつた。)

2. B地区



写真16 B地区（西から）

本遺跡の北よりIライン・Gライン以北一帯をB地区とし、さらに、五料山付近をa区、五料沼の北の丘陵地一帯をb区、西部に小高い山のある一帯をc区と分けた。本地区は、A・C地区に比べ遺構数、遺物数共に非常に多い。

(1) B—a区

遺構の分布 住居跡69、住居跡？83、計152軒。古墳中・後期住居跡最多。縄文時代住居跡は、b・c区に比べると少ないが、A・C地区に比べると多い。

遺物の分布 遺物総数は、12,049点。ほぼ完形の遺物9個体。他地区、他区に比べ非常に多い。うち、土師器最多。ほかの遺物も多地区に比べ多い。埴輪片は比較的少ない。

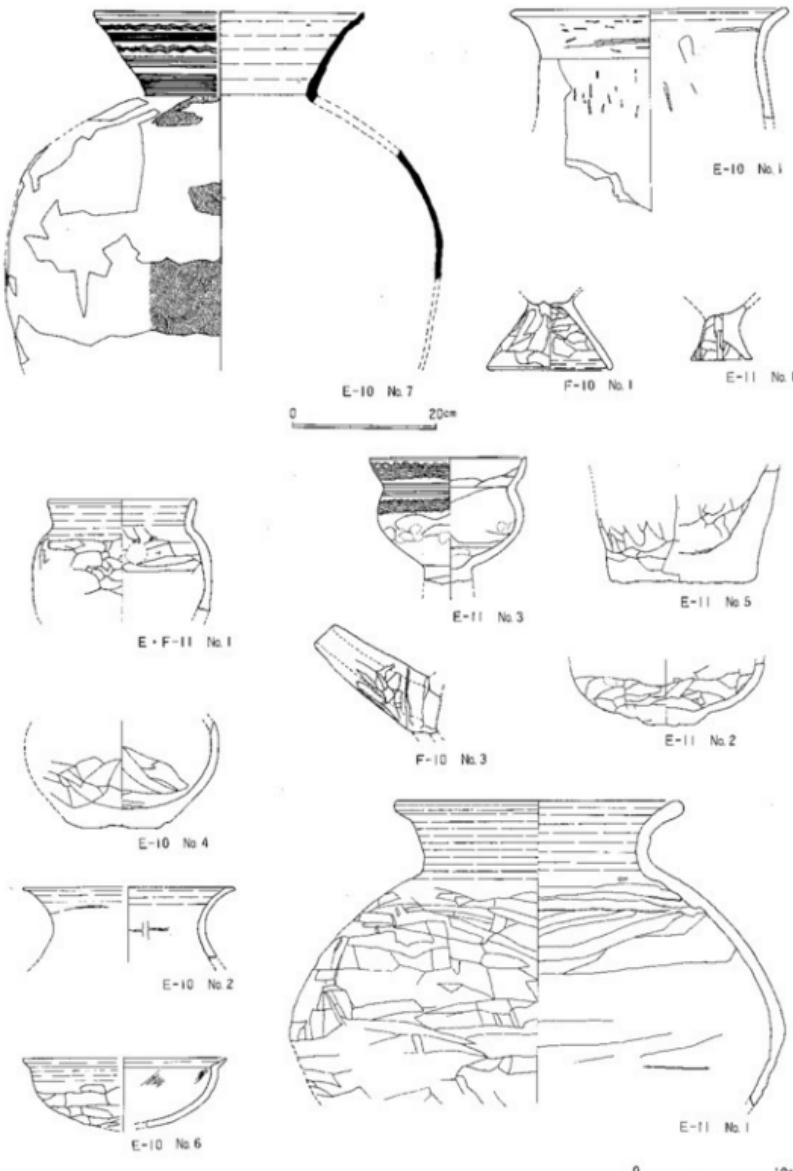


图12 B—a区出土遗物（Ⅰ）

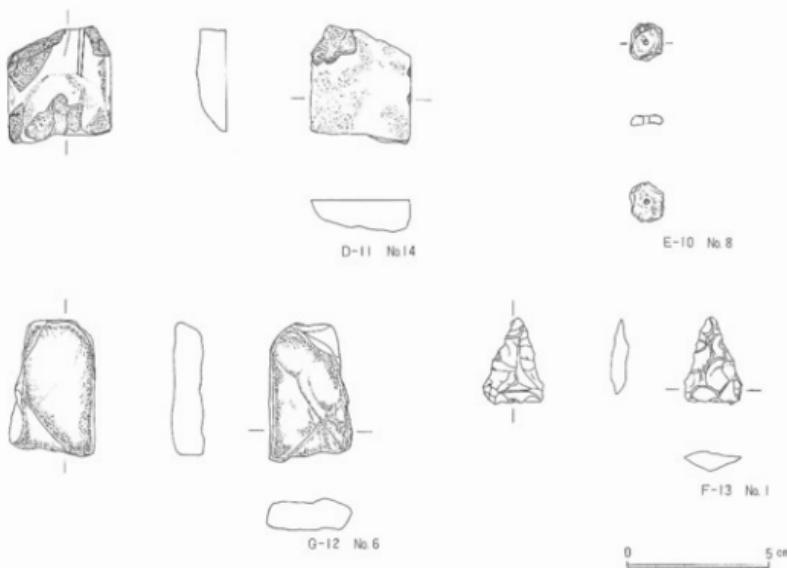


図13 B-a 区出土遺物 (II)



写真17 B-a 区出土遺物 (3~7)

(2) B-b 区

遺構の分布 周堀を伴う古墳1基(M1)と住居跡49軒、住居跡?90軒、計139軒が確認された。住居跡については他地区に比べ最も多数である。時代別にみると古墳中・後期の住居跡19軒、住居跡?44軒と本地区内では最も多く、縄文時代は住居跡19軒、住居跡?24軒と他地区に比べると最も多い。弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡については5軒、住居跡?18軒とB-a区に続き多い。弥生後期～古墳前期の住居跡も6軒、住居跡?は4軒と他地区に比べると最も多い。

M1 C-4・5、D-5グリッドに位置し、墳丘部はC-5グリッドにある円墳である。およそ東西4.4m、南北8.2mの主体部はすでに盗掘され新しい土で埋められていることが確認され、また墳丘部は何層にもわたる「版築」により築かれていることも確認された。墳丘部の径は約29mで、周堀は幅約4.2～6.8mで外径約38～39mである。周堀の確認面では多量の浅間の火山灰や軽石(1108年〈天仁元年〉降灰)の堆積が確認され、墳丘部、周堀共に残存状態は非常に良好である。6世紀中～後期と推定される。

遺物の分布 遺物総数は5,143点あり他に3～5片以上接合及び完形に近い遺物も20個体出土した。本地区内では土師器片が多く4,632点(ほか18個体)あり埴輪、弥生、繩文、須恵、陶器、石器の順が多い。特に埴輪は他地区に比べ非常に多いが、これはM1によるところが大きい。

M1 土師器片7、須恵器片1、埴輪片153点が出土した。埴輪は、円筒埴輪の破片はもみろん、鞍や、大刀の破片も出土した。埴輪片の多くは、円筒埴輪と形象埴輪である。

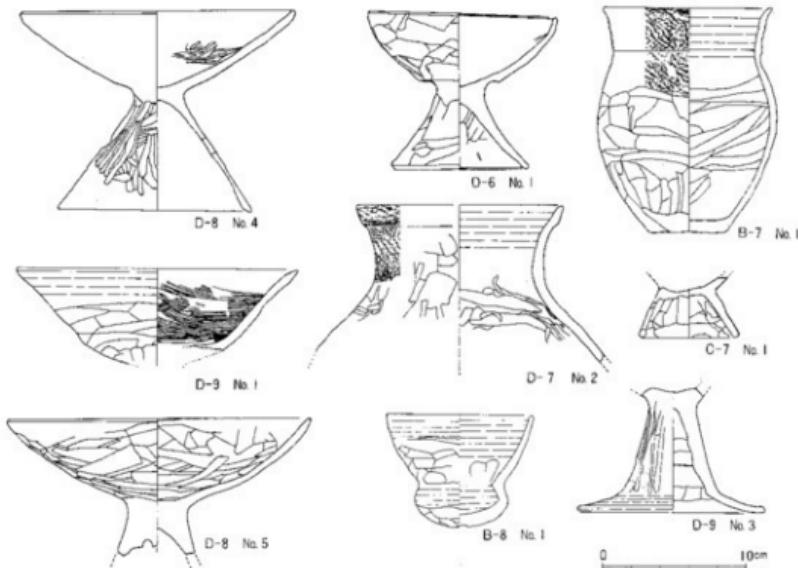


図14 B-b区出土遺物(I)

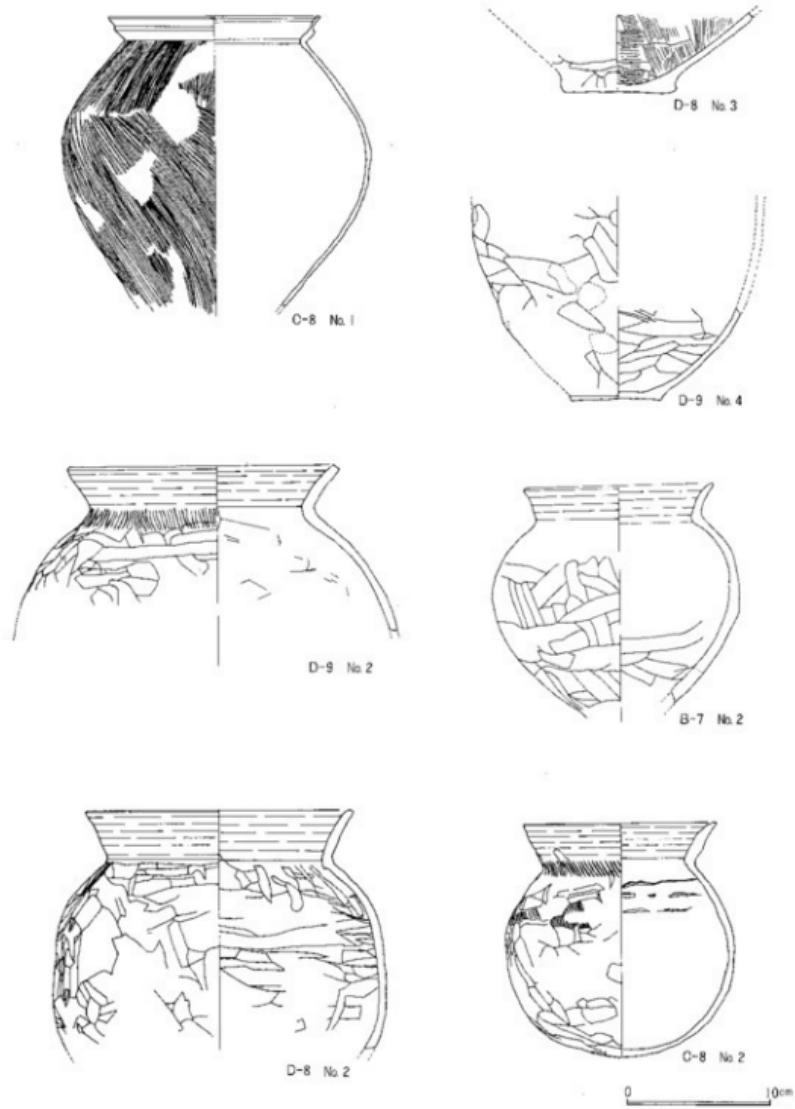


图15 B-b区出土遗物 (II)

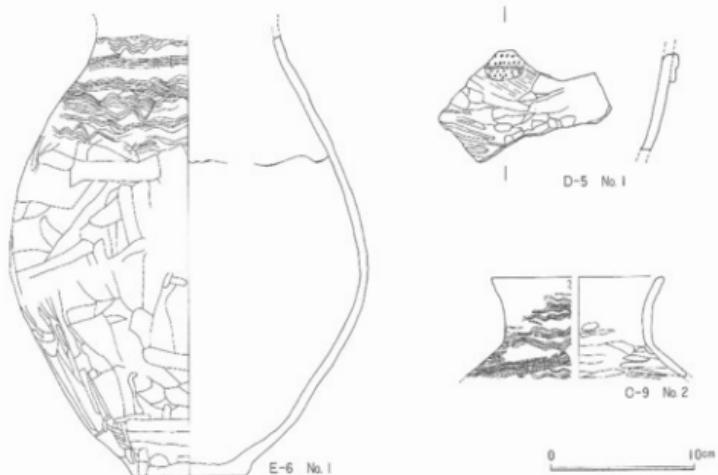


図16 B-b区出土遺物(III)

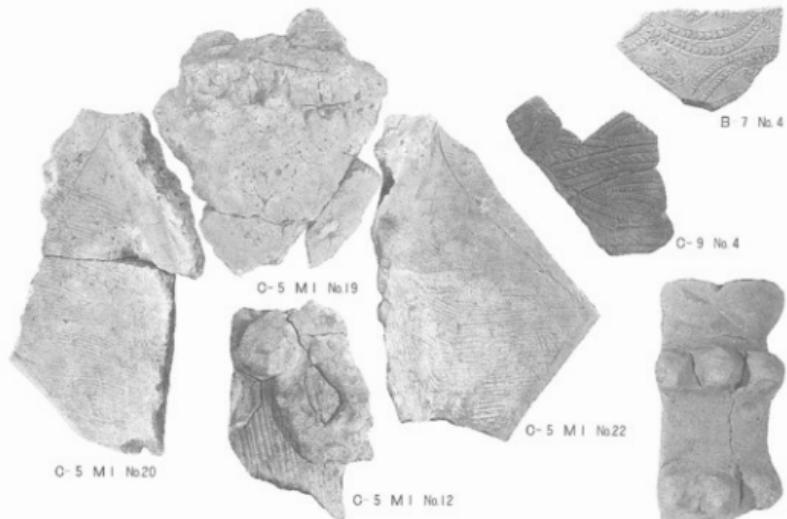


写真18 B-b区出土遺物(Ⅲ～Ⅴ)

C-5 MI No. 18

(3) B-c 区

遺構の分布 住居跡は古墳中期以降を中心に43軒、(?)29軒と面積の割に多く、丘陵中腹D-2・

3グリッドが最多。M2(6世紀中～後期と推定)周堀は幅1.0～5.6m、上部に浅間B軽石堆積。

遺物の分布 墓輪片がM2を中心には57

点出土。

その他

土師器

片等81

点出土

した。

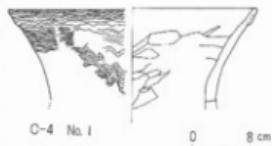


図17 B-c 区出土遺物

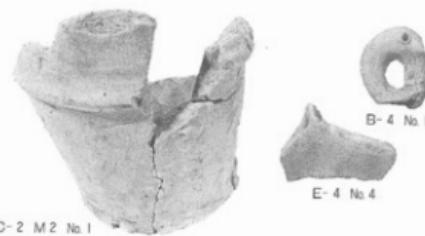


写真19 B-c 区出土遺物 (1/2～1/4)

3 C 地区



写真20 C地区（南から）

東西長3.8m南北長4.4mで、直径約14mの墳丘と周堀(浅間B軽石、Bアッシュ堆積、幅不明)を確認。石室の石(?)散乱。墳輪多数出土。M3・M4ともに全体としては残存状態良好。

遺物の分布 2ラインより西と中二子北は極少。H-7・I-7グリッドの遺物は盛土より出土。全体では土師器片、墳輪片が中心。鉄器は鋤と推定。M4からは鞆、^{ヒメ}鞆、太刀(三輪玉)、人物の足(?)、鬚等の墳輪片が140点出土。M3は時代不明。M4は6世紀中～後期と推定。

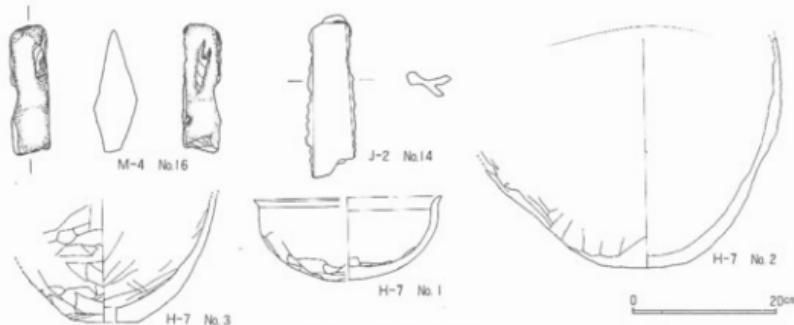


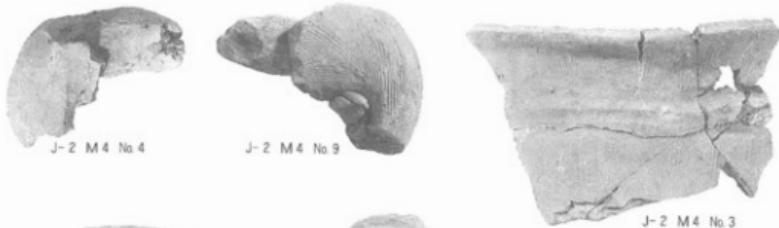
図18 C地区出土遺物



J-2 M4 No. 7

J-2 M4 No. 10

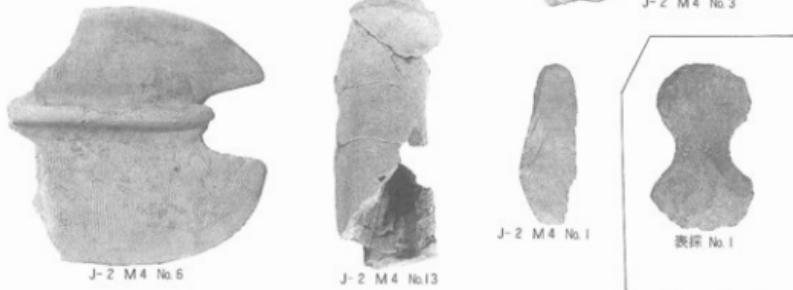
J-2 M4 No. 11



J-2 M4 No. 4

J-2 M4 No. 9

J-2 M4 No. 3



J-2 M4 No. 6

J-2 M4 No. 13

表様 No. 1

写真21 C地区出土遺物(約1/4)

写真22 内堀遺跡表探遺物(約1/4)

遺物観察表

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代
梅木北 H-1 No.1	土師器 甕	18.1 22.0 6	底部はあげ底。口縁部は外表面とともに横ナデ、体部はヘラケズリ調整してあるが、輪積み板を残している。住居跡埋土(4片)と接合。	残 古墳後期	
梅木北 H-1 No.2	土師器 甕	9.7 7.8 3.3	口縁部短く外表面とともにナデ調整。体部は外表面ともヘラケズリ調整で、内面にはヘラミガキ調整もみられる。底部は径の小さい不安定な平底。(和泉式)	完 形	古墳前期
梅木北 H-1 No.3	土師器 甕	10.8 7.8 6.5	口縁部短く外表面ともにナデ調整。体部はヘラケズリ調整。内面にはヘラミガキ調整あり。底部は平底でヘラケズリ調整。(和泉式)	完 形	古墳前期
梅木北 H-1 No.4	土師器 甕	9.4 6.7 2.2	口縁部短く外表面ともにナデ調整。体部はヘラケズリ調整。底部は径の小さい不安定な平底。(和泉式)	完 形	古墳前期

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・変形・調整	残存	時代
梅木北 H-2 No.2	土師器 塊	12.2 8.2 3.3 (和泉式)	口縁部内外面ともにナデ調整。体部上部はナデ調整。下部はヘラケズリ。内部もヘラケズリ調整。底部径の小さい平底。あげ底氣味。	完形	古墳前期
梅木北 H-2 No.3	土師器 塊	— — 4.3	底部はあげ底。体部内面は指オサエ調整。外面はヘラケズリ調整。	口縁部欠損	古墳中期
梅木北 H-2 埋土	紡錘車	外径 1.6 内径 7.0 厚 1.1		△	
梅木北 表採 No.1	土師器 塊	— 7.2 —	口縁部外傾し、内外面ともにナデ調整。体部はヘラケズリ調整。底部はあげ底。	△	古墳前期
梅木北 表採 No.2	土師器 塊	11.9 5.8 —	口縁部短く外傾し、内外面ともにナデ調整。体部はヘラケズリ調整。底部は平底。(和泉式)	△	古墳中期
K-14 No.1	土師器 高环	— — 14.8(推定)	外面ヘラケズリ調整。内面ヘラケズリ。底部はナゲ調整。脚柱部はふくらみを持つ。	脚部△	古墳中期
梅木東 No.1	縄文土器	— — —	沈線文	一部	縄文
I-14 No.2	縄文土器	— — —	縄文とたがの様な隆帯	一部	縄文
I-14 No.4	縄文土器	— — —	縄文を施文後隆帯	一部	縄文中期
I-14 No.5	縄文土器	— — —	沈線文	一部	縄文
I-15 No.1	縄文土器	— — —	φ5程の刺突文。隆帯に刺突文あり。	一部	縄文
I-15 No.4	縄文土器	— — —	隆帯に縄目を思わせる刺突文	一部	縄文
J-14 No.2	縄文土器	— — —	粘土紐を貼付し、約4mmおきに斜めの押型文を施す。	一部	縄文
J-14 No.3	縄文土器	— — —	沈線文	一部	縄文
J-14 No.4	縄文土器	— — —	縄文を施文後、貼付文を施す。	一部	縄文
J-15 No.2	縄文土器	— — —	縄文を施文後、沈線文を施す。	一部	縄文

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代	
I-15 No.3	縄文土器	— — —	縄文を施文後、沈線で四重の円を描く。	一部	縄文	
J-15 No.5	縄文土器	— — —	口縁部に連続刺突文をめぐらし、その下に縄文と沈線で施文されている。	一部	縄文	
J-15 No.7	縄文土器	— — —	貼付文。	一部	縄文	
J-15 No.8	縄文土器	— — —	脱い沈線文。押引文。	一部	縄文	
I-15 No.10	石器	長 幅 厚	7.2 4.3 0.9	刃部は両面からかなり丁寧に調整がなされている。	完形	
J-14 No.5	石器 石斧	長 幅 厚	6.4 7.3 1.3	片面に大きく自然面を残している。	×	
I-12 No.1	縄文土器	— — —	刺突文(爪形文)	一部	縄文 草倉期	
M-11 No.1	石器	長 幅 厚	— 4.5 2.4			
M-11 No.2	陶器	厚	0.9			
L-9 No.3	陶器	厚	0.6			
L-9 No.4	陶器	厚	1.0			
E-10 No.1	土器	18.5 — —	口縁部内外ともに横ナゲ調整。体部外面は縱方向のヘラケズリ。内面は横ナゲ調整。長脚器。	×	古墳後期	
E-10 No.2	土器	14.9(推定) — —	口縁部内外ともに横ナゲ調整。	口縁部のみ ×	古墳後期	
E-10 No.3	縄文土器 注口土器	— — —		注口部のみ	縄文後期	
E-10 No.4	土器	— — 5.8	体部外面はケズリ調整。内面はヘラケズリ調整。器肉は厚い。底部平底、ヘラオコシ。E・F-11No.1と接合	×	古墳後期	
E-10 No.5	縄文土器 深鉢	— — 13.0	体部縱方向のヘラケズリ調整。残存しているのは羽下半部の無文部である。	×	縄文後期	

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代
E-10 No 6	土師器 环	14.4(推定) 5.2(推定) —	口縁部短く端部で内傾。底部は丸い。口縁部ナデ調整。体部内外面ともにヘラケズリ調整。	× —	古墳中期
E-10 No 7	須恵器 大甕	38.7(推定) — —	口縁部に櫛書きの波状文。三条の沈線と二条の隆帯が施文されており、外腹頸部と口縁部内面は横ナデ調整。体部外面はハケメ。内面は青海波状文があり磨り消しもみられる。	× —	古墳中期
E-10 No 8	臼玉	外径 1.1 内径 0.2 厚 0.3	—	完形	—
E-11 No 1	土師器 甕	20.4 — —	器内厚く、口縁は外張してひらく、口縁部は内外面とも横ナデ調整。体部はヘラナデ調整しているが内部には輪積み痕のこす。	× —	古墳後期
E-11 No 2	土師器 甕	— — 3.3	底部径の小さい不安定な平底。外面へラケズリ調整。内面ナデ調整。	底部のみ	古墳前期
E-11 No 3	弥生土器 脚付甕	11.1 — —	口縁部と肩部に波状文、頸部に塵状文を施文。内外面ともヘラケズリ調整。指押さえ痕のこす。外面にヘラミガキあり。(傳式)	× —	弥生
E-11 No 4	土師器 高环	— — 4.2	内外面ともにヘラケズリ調整。底部ヘラ調整。	脚部のみ	古墳前期
E・F —11 No 1	土師器 甕	10.6 — —	口縁部外傾。内外面とも横ナデ調整。体部外面はケズリ調整。内面はヘラケズリのほか指押さえ痕あり。E-10No 4と接合。	× —	古墳後期
F-10 No 1	土師器 台付甕	— — 8.7	脚部外面は縱方向、内面は横方向のヘラケズリ調整。	台部のみ	古墳前期
F-13 No 1	石器 石鏡	長 2.9 幅 2.1 厚 0.6	無茎石鏡	完形	繩文
D-11 No 14	砥石	長 3.8 幅 3.5 厚 1.0	乳白色	× —	古墳
C-10 No 2	縄文土器 深鉢	— — —	ほぼ平縁。二本の平行沈線の間に爪形連続刺突文を施文。器形は朝顔形。内面に磨き。	一部	縄文
C-10 No 3	縄文土器	— — —	φ 8 の刺突文。平行沈線の間に爪形連続刺突文。	一部	縄文
D-10 No 4	縄文土器	— — —	半截竹管による沈線文と、平行沈線の間をうめる爪形の連続刺突文。	一部	縄文
D-10 No 7	縄文土器	— — —	縄文羅文。	一部	縄文施文。
E-10 No 16	縄文土器	— — —	二本の平行沈線の間に爪形の連続刺突文。	一部	縄文

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代
H-12 No 3	縄文土器	— — —	肉厚な平縁。隆起線により縄文を区画している。器形はキャリバー形。	一部	縄文中期
H-15 No 1	縄文土器	— — —	タガを思わせる貼付文と縄文施文。	一部	縄文
H-15 No 2	縄文土器	— — —	連続刺突による二本の平行線を6mm~2cmの間隔で施文。	一部	縄文
H-15 No 3	縄文土器	— — —	あまりはっきりしない縄文の上に爪形の連続刺突文。	一部	縄文
H-15 No 4	縄文土器	— — —	縄文施文。	一部	縄文施文。
五糸山南 No 1	縄文土器	— — —	φ2~3の刺突文と丸味をもった沈線。	一部	縄文
五糸山南 No 2	縄文土器	— — —	沈線とハケ目状の文様。	一部	縄文
C-10 No 12	石器 石斧	長 幅 厚 8.3 5.6 1.5	打製石斧の半分に欠けたもの。	×	
C-11 No 8	石器 石斧	長 幅 厚 9.4 4.8 1.6	片刃形石斧。	完形	
D-10 No 18	石器 石斧	長 幅 厚 8.9 5.7 1.6		×	
G-12 No 4	石器 石斧	長 幅 厚 8.4 5.9 2.0	打製石斧の半分に欠けたもの。	×	
G-12 No 5	石器 石斧	長 幅 厚 9.5 1.7 3.1	片面には自然面をかなり残しており刃部はあまり鋭くない。短冊形。	完形	
G-12 No 6	石製 模造品	長 幅 厚 4.6 2.9 1.6		完形	
H-12 No 4	石器 石斧	長 幅 厚 9.8 3.6 1.2	片面はほぼ自然面のままである。短冊形。	完形	
B-7 No 1	弥生土器 壺	11.8 15.8 5.3	段状口縁。肩の部分まで縄文。(赤井戸式)文様の部分以外は内外面ともにへら磨き。B-6(3片)と接合。	完形	弥生
B-7 No 2	土器 壺	13.3 — —	口縁部外傾。体部上半丸い。口縁部内外面ナダ調整。体部内外面共にヘラケズリ調整。	×	古墳前期

通物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代
B-8 No.1	土師器 壺	10.2 7.9 —	口縁部や内窓しながらひらく。体部扁平で丸底。内外面ともにへラケズリ後でいねいなナデ調整。	X	古墳前期
C-7 No.1	土師器 台付壺	— — 7.0	台部外縁はタテハケ調整。内面はヨコハケ調整。	台部のみ	古墳
C-8 No.1	土師器 台付壺	14.9 —	S字口縁。外面ハケ調整。(石田川式) 器内薄い。	X	古墳前期
C-8 No.2	土師器 壺	13.4 16.4 —	口縁部内厚で外傾。体部丸く板状工具によるハケ目あり。底部は丸底。	完形	古墳前期
C-9 No.2	弥生土器 壺	— — —	折返し口縁。口縁部全面に波状文。(樽式) 体部上端部に板状工具による彫状文。内面はヘラミガキ。	X	弥生
D-5 No.1	弥生土器 壺	— — —	符点貼付文。外面ヘラミガキ。	極くわずか	弥生
D-6 No.1	土師器 高壺	12.7 12.0 9.5	口縁部内窓してひらく。内外面ともにヘラミガキ。	ほぼ完形	古墳前期
D-6 No.2	弥生土器 壺	— — —	折返し口縁部と肩の部分に彫文。(赤井戸) 口縁部と内面にヘラケズリ調整。	X	弥生
D-8 No.2	土師器 壺	18.8(推定) — —	口縁部や肉厚で外反。内外面ともにナデ調整。体部丸味あり。へラケズリ調整。内面接合痕あり。	X	古墳中期
D-8 No.3	土師器 壺	— — 8	外面へラケズリ調整。内面ヨコハケ顯著。底部平底。	X	古墳中期
D-8 No.4	土師器 高壺	19.2 14.2 13.5	内外面ともにヘラミガキ調整。脚部内側はヘラケズリ調整。脚部に4つの円孔あり。	完形	古墳前期
D-9 No.1	土師器 高壺	19.9 — —	口縁部外面ナデ調整。外面へラケズリ。壺部下部にタテハケ。内面にヨコハケ目顯著。	壺部のみ	古墳前期
D-9 No.2	土師器 壺	19.2 — —	口縁部外縁はナデ。内面は板状工具によるナデ。頸部外縁にタテハケ。体部外縁に斜位ナデ調整。	X	古墳中期
D-9 No.3	土師器 高壺	— — 13.0	外面縱方向ケズリ後ミガキ。頸部ヨコナデ。内面へラケズリ調整。	脚部のみ	古墳後期
D-9 No.4	土師器 壺	— — 6.3	体部外面へラケズリ調整。内面ハケメ顯著。内外面とも接合痕のこす。平底。	X	古墳
E-6 No.1	弥生土器 壺	— — 7.8	頸部に波状文、彫状文、体部は肩まで波状文あり。体部外縁ヘラミガキあり。底部平底。	X	弥生

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代
D-8 No 5	土師器 高 坯	21.5 — —	内外面ともにヘラケズリ後ヘラミガキ調整。脚部も竪方向にヘラミガキ調整。脚柱部に4つの円孔あり。坯部はかなりゆがみあり。	×	古墳前期
C-5 No 18 (M 1)	器財埴輪 太 刀	— — —	三輪玉。	— 部	古 墳
C-5 No 12 (M 1)	器財埴輪 鞍	— — —	紐の結び目を粘土紐の貼付で表わしている。	— 部	古 墳
C-5 No 19 (M 1)	器財埴輪 鞍	— — —	矢筒上部。C-5 No 20・22と接合。	— 部	古 墳
C-5 No 20 (M 1)	器財埴輪 鞍	— — —	負い紐と翼部。C-5 No 19・22と接合。	— 部	古 墳
C-5 No 22 (M 1)	器財埴輪 鞍	— — —	負い紐と翼部。C-5 No 19・20と接合。	— 部	古 墓
B-7 No 4	縄文土器	— — —	二本の沈線の間に半截竹管の連続刺突文を施文。	— 部	縄 文
C-9 No 4	縄文土器	— — —	沈線と刺突による文様。	— 部	縄 文
C-4 No 1	弥生土器 甌	— — —	折返し口縁。口縁部全面に波状文。(棒式)口縁内面はみがきとナデ調整。	× ○	弥 生
D-2 No 1 (M 2)	円筒埴輪	— — —	継ハケ目の上に変形した台形のタガが付く。底部は一周残存している。	— 部	6世紀中 ～後期
E-4 No 4	縄文土器 深 鉢	— — —	口縁部破片。円孔あり。	— 部	縄文中期
B-4 No 1	縄文土器	— — —	口縁部ドーナツ状のかざり。	— 部	縄文中期
H-7 No 1	土師器 环	13.0(推定) 6.8 —	口縁部短く外傾。底部は丸底。外面はヘラケズリ調整。内面は全面横ナデ調整。	×	古墳中期
H-7 No 2	土師器 甌	— — 5.0	底部径の小さい不安定な平底。体部外面ヘラケズリ調整。	— 部	古墳前期
H-7 No 3	土師器 瓶	— — 4.5	内外面ともにヘラケズリ調整。底部は平底で中心部に1つずつ18の円孔あり。	×	古墳後期
J-2 No 16 (M 4)	石 製 品	長 幅 厚 8.7 2.5 2.9	断面はくさび形。	×	

遺物番号	器種	寸法	器形の特徴・整形・調整	残存	時代
J-2 №14 (M 4)	鉄 器 歎?	— — —		一部	
J-2 №7 (M 4)	器財埴輪 木 刀	— — —	三輪玉。	一部	古 墳
J-2 №10 (M 4)	器財埴輪 柄	— — —		一部	古 墓
J-2 №11 (M 4)	器財埴輪 駆	— — —	矢筒にさした5本の矢。	一部	古 墓
J-2 №4 (M 4)	形象埴輪 人物埴輪	— — —	肩の部分。	一部	古 墓
J-2 №9 (M 4)	形象埴輪 人物埴輪	— — —	肩の部分。	一部	古 墓
J-2 №3 (M 4)	円筒埴輪	— — —	口縁部破片。口唇部に至って外反する。縱方向のハケ目の上に変形した台形タガを付す。透し孔の一部が残る。	一部	6世紀中 ～後期
J-2 №6 (M 4)	形象埴輪 人物埴輪 女 子	— — —	女子の髪の部分。	一部	古 墓
J-2 №13 (M 4)	形象埴輪 人物埴輪	— — —	足の部分か?	一部	古 墓
J-2 №1 (M 4)	石 器	長 11.8 幅 4.4 厚 1.8	片刃形石斧か?片面は自然面のままである。	完 形	
表採 №1	石 器 石 斧	長 12.3 幅 7.9 厚 2.8		完 形	
梅木遺 跡北 №3	円筒埴輪	— — —	縦ハケ目の上に変形した台形のタガが付く。	一部	6世紀中 ～後期
梅木遺 跡北 №5	陶 器	— — —	底部高台付。	一部	
梅木遺 跡北 №6	陶 器	— — —	底部高台付。	一部	

地区別統計表

遺物 地区	土器○	須恵器△	縄文土器●	弥生土器▲	石器□	埴輪■	陶器類▽	鉄器▼	合計
A 地区	1,378(7)	36	215	6	10	22	29	0	1,696(7)
	b 区	644	13	12	4(1)	6	16	17	0 712(1)
	小計	2,022(5)	49	227	10(1)	16	38	46	0 2,408(6)
B 地区	a 区	10,786(6)	56(1)	660(2)	418	74	26	29	0 12,049(9)
	b 区	4,632(8)	29	33(1)	187(1)	14	232	16	0 5,143(8)
	c 区	66(1)	0	6	2	4	52(5)	2	0 132(6)
小計	15,484(25)	85(1)	699(3)	607(1)	92	310(5)	47	0 17,324(35)	
C 地区	743(5)	26	64	3	27	187(2)	16	1	1,067(7)
表 探	73	0	2	0	2	0	0	1	78
合計	18,322(30)	160(1)	992(3)	620(2)	137	535(7)	109	2	20,877(30)

地区別遺物統計表(1)

()は3~5片以上接合又は完形

遺物 地区	土器○	須恵器△	縄文土器●	弥生土器▲	石器□	埴輪■	陶器類▽	鉄器▼	合計
梅木遺跡北	365(7)	1	1	0	1	15	6	0	389(7)
M 1	7	1	0	0	0	153	0	0	161
M 2	0	0	0	0	0	16(5)	0	0	16(5)
M 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
M 4	1	22	0	0	2	138(2)	2	1	166(2)

地区別遺物統計表(2)

()は3~5片以上接合又は完形

住居跡 地区	○	●	△	▲	□	■	◇	◆	小計		合計
									○△□◇	●▲■◆	
A 地区	a 区	0	3	0	1	12	4	4	3	16	11 27
	b 区	6	2	0	0	6	1	4	4	10	7 17
	小計	0	5	0	1	18	5	8	7	26	18 44
B 地区	a 区	5	15	5	4	30	36	29	28	69	83 152
	b 区	19	24	6	4	19	44	5	18	49	90 139
	c 区	10	4	3	3	25	20	5	2	43	29 72
小計	34	43	14	11	74	100	39	43	161	202	363
C 地区	0	1	0	0	0	3	0	1	0	5	5
合計	34	49	14	12	92	108	46	56	186	225	412

地区別住居跡統計表(1)

住居跡 地区	○	●	△	▲	□	■	◇	◆	小計		合計
									○△□◇	●▲■◆	
梅木遺跡北	0	0	0	0	3	1	2	0	5	1	6

地区別住居跡統計表(2)

凡て(住居跡表裏印) ○● 縄文時代竪穴式住居跡
 △▲ 弥生後期～古墳前期(石田川)竪穴式住居跡
 □■ 占墳中期～後期竪穴式住居跡
 ◇◆ 弥生前～中期、古墳後期以降軒窓式住居跡

VI まとめ

今回の確認調査の結果を、各地区に分け、図・写真・表と共に簡単に記したが、ここではそれらの情報（事実）を分析し、まとめてみたい。

1. 遺構について

遺跡全体で、住居跡（住居跡と推定されるもの）186軒、住居跡？（住居跡の疑いのあるもの）225軒、計412軒確認された。そのうち、古墳中・後期の住居跡が最も多く92軒、次いで弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡が多く47軒、以下縄文時代の住居跡34軒、弥生後期～古墳前期の住居跡14軒がそれぞれ確認された。住居跡？の時代別数も、住居跡の場合と同じ順に多かった。

次に各地区ごとの特色を見てみたい。

A地区 A地区は、住居跡26軒、住居跡？18軒、計44軒確認された。その内訳は、遺跡全体の傾向と同じく古墳中・後期の住居跡が最も多く18軒、次いで弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡が8軒確認されたが、その他の住居跡は認められなかった。住居跡？では、弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡7軒、古墳中・後期の住居跡と縄文時代の住居跡が各5軒、弥生後期～古墳前期の住居跡が1軒推定された。

また、住居跡以外では、昭和60年度調査の梅木遺跡の北から柵列の柱穴が19個確認されたことが考古学上意義が大きい。環濠の確認もトレンチを掘るなど努力したが確認できなかった。

A地区全体の住居跡の分布を見ると、およそKラインから南にあり、a区では桂川氾濫原より比高差約1mの平坦地に、b区では丘陵地にあることが確認された。A地区もC地区ほどではないが、広い面積の割には住居跡確認数が少なかった。

つまり、調査面積の広い割には住居跡が少ないと、住居跡の時代別数では本遺跡全体の傾向と同じく、古墳中・後期の住居跡が最も多いこと、Kライン以南に住居跡が集中していること、梅木遺跡の北部分から柵列の柱穴が19個確認できたこと、古墳らしきものは認められなかったことなどが本地区的特色である。

B地区 B地区は住居跡161軒、住居跡？202軒、計363軒と本遺跡の中でもとりわけ住居跡が密集している地域である。時代別住居跡数でみると、古墳中・後期の住居跡が最も多く74軒、次いで弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡が39軒、そして縄文時代の住居跡が34軒、弥生後期～古墳前期の住居跡14軒となっており、各時代ともに住居跡数はA・C地区に比し非常に多数で、時代別住居跡数の順序は遺跡全体の傾向と共通する。また、A・C地区では確認できなかった縄文時代と、弥生後期～古墳前期の住居跡が確認されたことが大きな特徴である。

住居跡？の時代別数では、古墳中・後期の住居跡が100軒、弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡が48軒、縄文時代の住居跡が43軒、弥生後期～古墳前期の住居跡が11軒となり、住居跡の場合と同じ順序となっている。この時代別住居跡？の数の順序は、遺跡全体の場合とも同じ傾向となっている。

a・b・c区のそれぞれの特色は、五料山南麓・西麓のa区では、b・c区に比し、古墳中・後期の住居跡30軒、住居跡？36軒、弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡29軒、住居跡？28軒と多いが、縄文時代の住居跡は5軒、住居跡？は15軒と少ない。五料沼の北にあたるb区では、a・c区に比し、縄文時代の住居跡が19軒、住居跡？が24軒と多い。^{つむり}古墳の北にあたるc区では、古墳中・後期の住居跡が25軒とa区より少なく、b区より多い。また縄文時代の住居跡は、b区より少なくa区より多い。その他の時代の住居跡、つまり、弥生前・中期及び古墳後期以降の住居跡が5軒、弥生後期～古墳前期の住居跡は3軒とa・b区より少ない。

B地区全体の住居跡分布状況をみると、時代により集落の密集地域が推移しているように思われる。つまり、縄文時代はb区、弥生前・中期及び古墳後期以降はa区、弥生後期～古墳前期にかけては、a・b・c区全体に散在、古墳中・後期はa区中心でb・c区にも満遍なく存在。

住居跡のほかの遺構としては、古墳が2基（M1・M2）確認されている。M1はB軽石（1108年〈天仁元年〉浅間山噴火による降灰）の堆積するしっかりした周堀が円形にめぐり、墳丘部もローム土・黒色土を用いたしっかりした版築（様々な土を交互に盛土し、押し固めて築いたもの）がほどこされていた。立派な円墳である。M2は確認した周堀部分とみられる範囲の確認面より80～90cm上層部にB軽石層の堆積が見られた。周堀と推定される部分の覆土は黒色土で、白色系の軽石を5%以上含んでいた。また、墳丘部と推定される部分の覆土は黒褐色土で、白色系軽石を3%以下ではあるが含んでいた。炭化物も散っていた。墳丘部の全体の形状は本確認調査ではつかめなかった。

つまり、言い換えると、B地区はA・C地区に比し住居跡が圧倒的に多く、縄文時代から古墳時代後期以降にわたり人々が生活をしていた痕跡が密度濃くあることから、人間の居住条件のそろった好適地であるといえる。また、埴輪片等から考察して6世紀中頃～後期と推定される古墳が2基確認されている。

C地区 C地区は住居跡？が5軒、広い面積に点在している状況であった。ただし、1・2ライン間より西の部分に既にローム面まで削平されていたので、本来遺構があったものかどうかは不明である。

また、C地区では古墳が2基（M3・M4）確認されており、共に浅間B軽石が堆積している周堀が確認された。調査の結果M3の周堀は円形にめぐるようと思われる。墳丘部の形状については、今回の確認調査ではつかめなかつたが、M3のローム土による墳丘部の墳頂部は既に削平を受けており、M4の主体部は盜掘され新しい土で埋め戻されていた。しかし、残存状態はM3・M4共に良好でM4については版築の様子もしっかりしている。M3は遺物を全く伴わなかつたが、M4は円筒埴輪や器財埴輪などの形象埴輪の破片が多数検出された。M4は埴輪片等から紀元後6世紀中頃～後期のものと推定される。M3は埴輪片が検出されなかつたため時代は不詳である。

つまり、C地区的特色はA・B地区に比し住居跡の数が少ないと、そして、代わりにM3・

M4と残存状態が良好な、立派な古墳が2基確認されたことである。

以上、本遺跡の遺構について述べた。次には遺物について述べたい。

2. 遺物について

遺跡全体で遺物片は20,877点検出され、ほかに3～5片以上接合及び完形の遺物は50個体出土した。そのうち、破片は土師器片が最も多く18,322点、次いで縄文土器片が992点、以下弥生土器片が620点、埴輪片が535点そして、須恵器片160点、石器137点、陶器類109点、鉄器2点の順である。3～5片以上接合及び完形の遺物は、土師器37個体、埴輪7個体、縄文土器3個体、弥生土器2個体、須恵器1個体、そして、石斧などの石器の順にならぶ。

ところで、我々は昭和61年度末から昭和62年度当初にかけて、事前に確認調査予定地(200,000m²(369,000m²のうち))に散布する遺物を採取したが、その結果(付図4)と今回の確認調査結果による遺物分布状況(付図3)を比べると、表面調査の時に遺物数が非常に多かったグリッド(50×50mが1グリッド)が確認調査結果でも、遺構数・遺物数共に非常に多かったとは単純に言えないが、傾向としては、表面調査で遺物が採取できれば、その場所の下層には遺構があるということが付図2と付図3と付図4を見比べると想定できる。確認調査の結果の遺構分布と遺物分布の状況(付図2・3)を見比べると遺物数の多いグリッドがそのまま遺構数の多いグリッドとは単純には言えないが、傾向としては、遺物が検出されれば遺構も伴うということが言える。

さて、次に各地区ごとの特色を見てみたい。

A地区 A地区全体で遺物片2,408点、3～5片以上接合及び完形の遺物6個体が検出された。そのうち、破片は遺跡全体の傾向と同じく土師器片が最も多く2,022点、次に多いのが縄文土器片で227点となっている。ほかに遺物片の数の順序は遺跡全体の傾向と異なり、須恵器片49点、陶器類46点、埴輪片38点、石器16点、弥生土器片10点となっている。特色としては、陶器類が46点と比較的多いことが言える。

a区とb区の遺物片数を見ると、総数でも、遺物の各種類別数でもa区がb区を上回る。またb区の中の五料沼の東にあたる谷地(現況は水田)部分から遺物が検出できなかったのも特色としてあげられる。

A地区は、遺物片と3～5片以上接合及び完形の遺物の数が、C地区より多くB地区より少なく、陶器類の破片の数が比較的多いこと、谷地部分からは遺物が検出できなかったこと、そして、a区の方がb区より遺物を多く検出できたことが特色として言える。

B地区 B地区全体で遺物片17,324点、3～5片以上接合及び完形の遺物35個体が検出された。これは、本遺跡のA・C地区に比し、圧倒的な多さである。そのうち、破片は遺跡全体の傾向と同じく土師器片が最も多く15,484点、次に多いのが縄文土器片で699点、続いて弥生土器片が607点、埴輪片が310点の順である。ほかの遺物片の順序は遺跡全体の傾向と異なり、石器92点、須恵器片85点、陶器類47点となっている。

a・b・c区を比べると、a区の遺物片数が最も多く、次にb区である。c区は、a・b区に

比べ遺物片数は極端に少ない。遺物の各種類別数でもほとんどa・b・c区の順であるが、埴輪片数だけは異なり、b区が最も多く232点、次にc区で52点、最後はa区で26点となっている。

つまり、B地区の特色は、遺物片数が本遺跡のA・C地区に比し圧倒的に多いということ、埴輪片はb・c区に多く、ほかの遺物片はa・b区に多いことである。

C地区 C地区全体で遺物片1,067点、3～5片以上接合及び完形の遺物7個体とA・B地区に比して、極端に少ない。そのうち破片は遺跡全体の傾向と同じく土師器片が最も多く743点あるが、ほかの遺物片の順序は遺跡全体の傾向と異なり、埴輪片187点、繩文土器片64点、石器27点、須恵器片26点、陶器類16点、弥生土器片3点、鉄器1点とならぶ。ところで、各種類別遺物片数をA・B地区と比べてみると、ほとんどの種類の遺物片がA・B地区より数で劣っている。また石器、埴輪片数はB地区より少ないがA地区より多い。そして鉄器（鎌？の一部）については、A・B地区では検出されていない。

つまり、C地区的特色は遺物総数は、A・B地区より極端に少ないが、鉄器が1点ではあるが検出されていること、石器、埴輪片数が比較的多いことがあげられている。

さて、以上、A・B・C地区的遺物について述べてきたが、簡単にまとめてみると、遺物分布の場合も遺構分布と同じく、B地区・A地区・C地区の順に遺物数も多い。また、埴輪片数に限ってみると、B地区が、M1・M2もあり、やはり多いが、次にM3・M4のあるC地区が多く、古墳が確認できなかったA地区が38点と少なかった。そして、B地区に限ってみると、a・b区が遺物の密集地域であることが言える。

次に結語を記して、「まとめ」を終えたい。

3. 結 語

今回の確認調査の目的は、前橋市仮称大室公園整備事業の一環として史跡整備基本構想の作成のための整備検討委員会に公園予定地内の埋蔵文化財の種類や時代・分布状況などの情報を提供することであったが、本確認調査により所期の目的は達成されたものと考える。

ところで、今回の確認調査によって検出できた遺構と遺物は群馬県ならびに前橋市の古代史を解明していく上で貴重であり文化財としての価値が高いものばかりである。よって、本来は住居跡の密集している五料山南麓・西麓のB-a区や五料沼の北にあたるB-b区など本遺跡の埋蔵文化財（遺構と遺物）は現状のままで永く保存をしていくことが望ましいと思われる。特に本遺跡の中でも文化財的な価値が高いと思われる梅木遺跡北地区やM1・M2・M3・M4の4基の古墳は現状保存をし、国指定史跡の前二子・中二子・後二子の3つの古墳と併わせて復元或は史跡整備を行い、369,000m²に及ぶ仮称大室公園が一大史跡公園として設計され、実施されることを切に望むものである。

主要参考文献

「群馬のはにわ」 群馬県立歴史博物館 S54・10・20

「群馬県立歴史博物館紀要 第1号」 群馬県立歴史博物館 S55・3・31

「梅木遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 昭和61年
「柳久保遺跡群II」 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985

図

版

4



写真29 古墳（M 4）確認状況（東から）



写真30 トレンチ掘削状況（北西から）



写真27 古墳（M 2）確認状況（東から）



写真28 古墳（M 3）確認状況（南西から）

図

版

2



写真25 梅木遺跡北邊構確認状況（西から）



写真26 古墳（M1）確認状況（西から）



写真23 確認調査前（北西から）



写真24 作業風景（東から）

内堀遺跡群

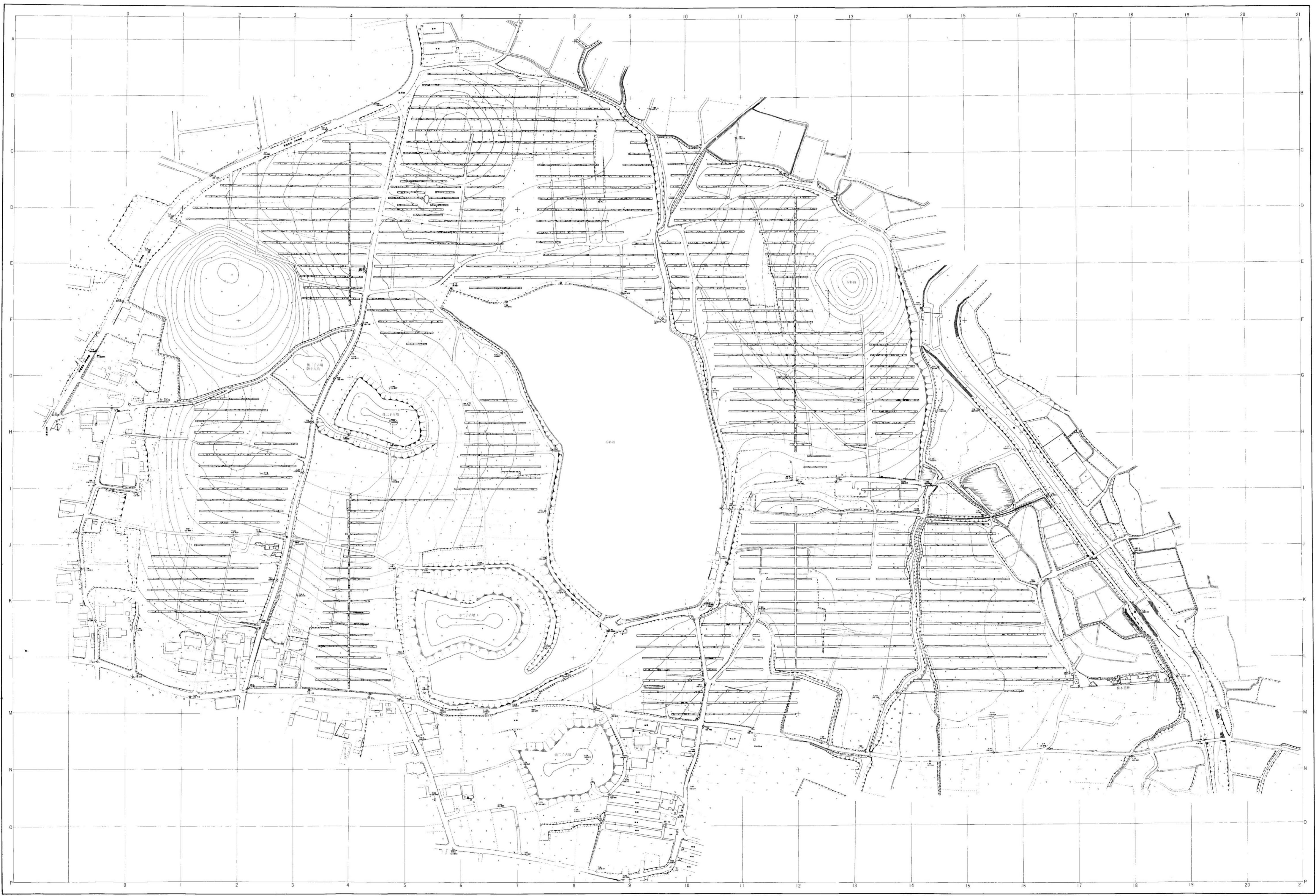
昭和63年3月1日 印刷

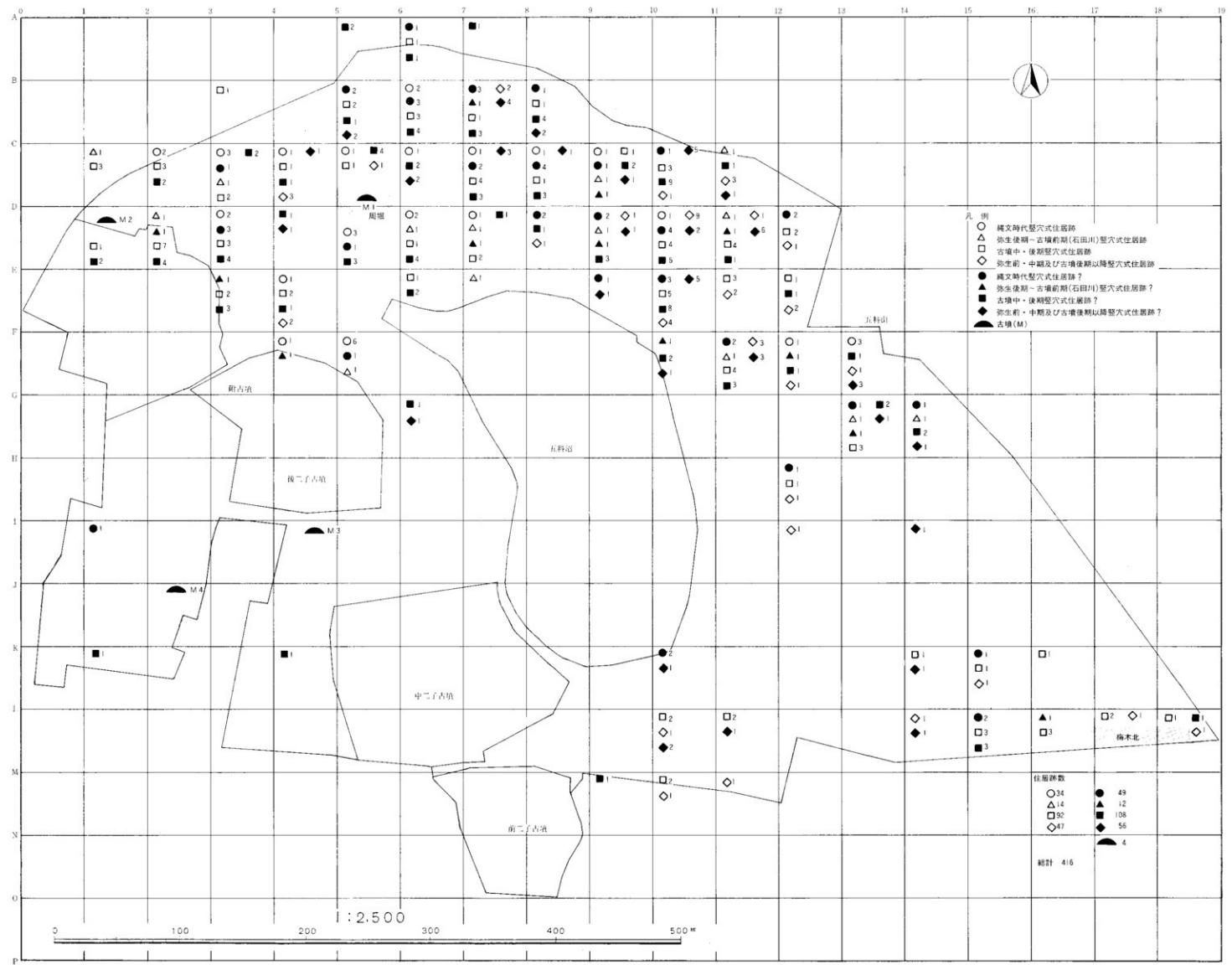
昭和63年3月10日 発行

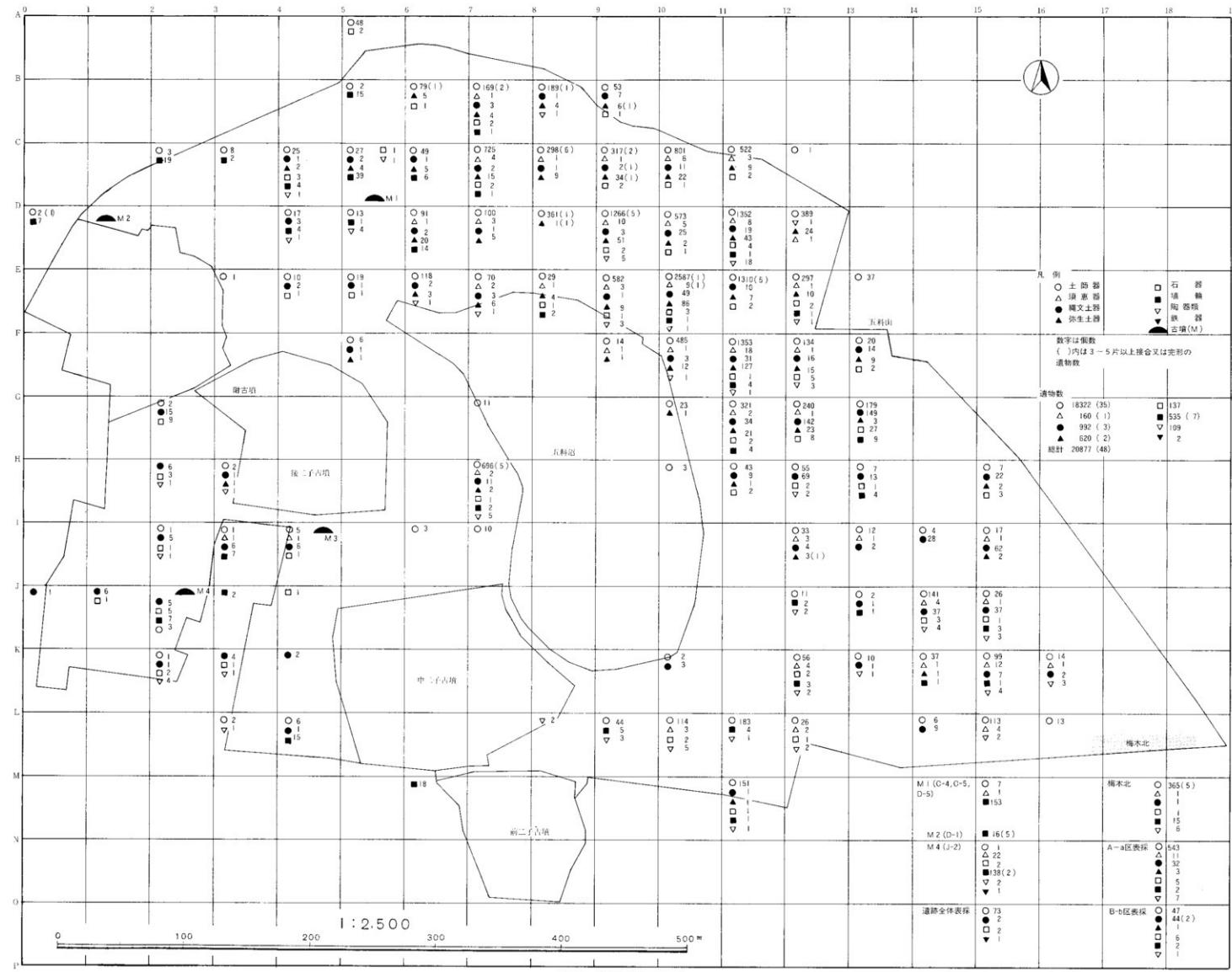
編集・発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号

印 刷 朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

内堀遺跡群全体図







付図3 遺物分布図 (1:2500)

